

開催にあたって

日本生命財団は昭和54年に人間性・文化性あふれる真に豊かな社会の建設に資することを願って、日本生命により設立されました。

設立以来、助成の柱のひとつとして、「人間活動と環境保全との調和に関する研究」をテーマに、環境問題に関する研究助成を行っております。毎年実施してきた研究助成は、これまでに**37回、累計で1,118件、助成総額26億9,200万円**に達しています。

当財団は、これらの研究がさらに進展し研究者間の交流や情報交換が円滑に行われることを願い、併せてテーマに関心を持たれる方々の意見交換の場を提供するため、「助成研究ワークショップ」を開催いたしておりますが、このワークショップも今回で31回目を迎えることとなりました。

今回のワークショップでは、「人間活動と環境保全との調和に関する研究—環境保全・再生における都市と農山村の役割、流域を中心とする環境保全・再生、自然災害と環境保全—」を募集課題とする学際的総合研究に採択された研究チームから、その研究成果をご報告いただきます。

水は生態系全ての相互作用に関わっており、私たちの生活はもちろんのこと生命活動とは切り離せないものです。今回取り上げる「流域」は、森林から沿岸海域まで広い範囲に及びますが、上流から下流・沿岸海域にいたる様々な地域において、自然と人間活動の関係は多くの課題を有しています。流域における健全な水循環やそれに伴う生態系等の維持・保全を持続可能なものとしていくことが求められています。

今回の研究は、「ヤマ・カワ・ウミに生きる知恵と工夫—岩手県閉伊川流域における在来知を活用した環境教育の実践—」と題したテーマのもとに、岩手県の閉伊川流域を中心に調査・研究を進めてきたものです。東北地域をフィールドとして、小規模生産活動に関する在来知が流域の環境保全に果たす役割を再評価し、大震災からの地域社会の復興に在来知がどのような役割を果たすのかを考察するとともに、それらの在来知を活用した環境教育の実施を通じて、長期的に持続可能な社会の構築に貢献しうる道を探ります。

まず、代表研究者である総合地球環境学研究所の羽生客員教授から研究の全体概要について説明いただいた後、各研究者から研究成果を発表していただきます。その後、ゲストの方々からコメントをいただき、最後に今回のテーマについて総合討論を行います。

このワークショップの開催が、在来知を活かした小規模生産活動の再評価を通じて環境負荷の少ない持続可能な社会をつくっていく取組みの一助となり、これからの環境・地域・社会の再生・保全に向けた活動を推進していく契機となることを強く願っています。

公益財団法人 日本生命財団
公益財団法人 ニッセイ緑の財団
総合地球環境学研究所
「在来知と環境教育」研究会